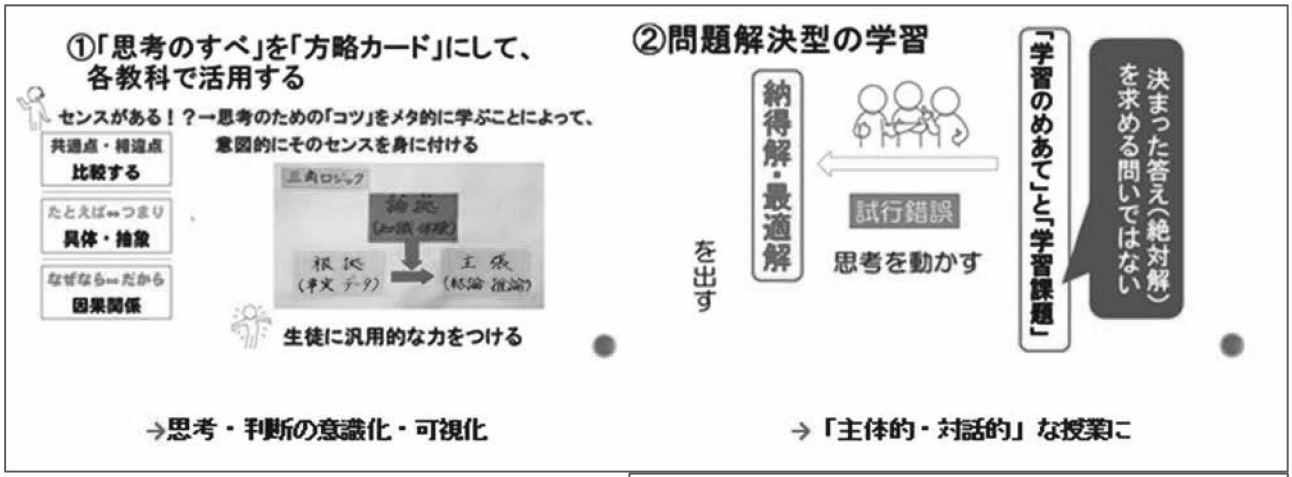
# 論理的思考を基盤とした「学びをつなぐカリキュラム・マネジメント」
## ～「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて～

森　　淳
（八幡市立男山東中学校長）

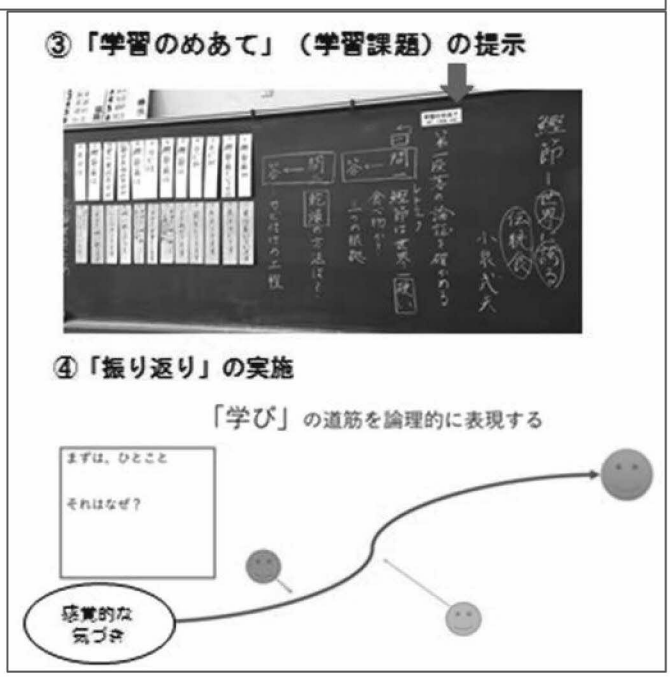
### 1　はじめに

（1）これまでの本校の研究

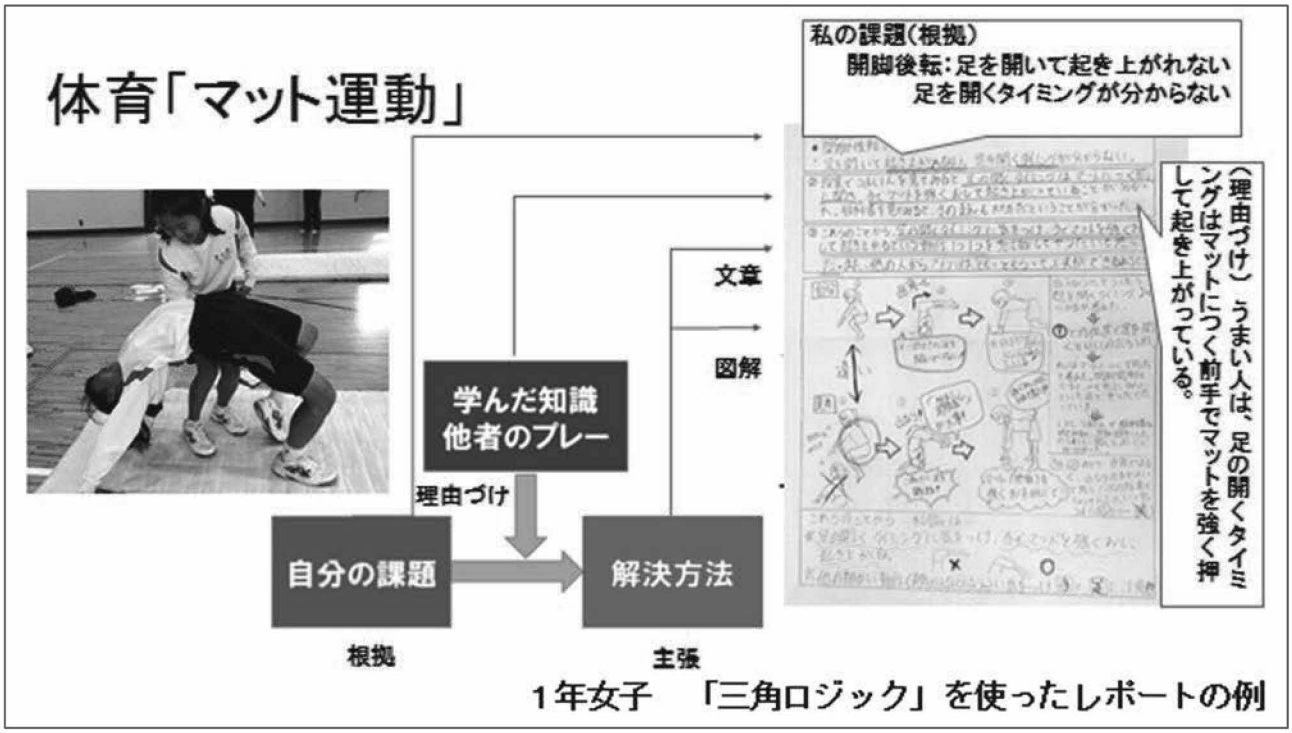
本校では、平成２７年度より学習者の「論理的思考力」を鍛えることをテーマとし、５年間研究活動を行ってきた。この間、教師が授業をする上で「主体的・対話的な学びとは何か」を考え実践を積み重ねてきており、昨年度は、学習者の「振り返り」から「深い学びとは何か」をボトムアップ的に捉える試みを行った。




まず、「思考のすべ」（比較する・具体と抽象・因果関係・三角ロジック）を方略として導入したことが研究の端緒である。さらに、「問題解決型の学習」を組み合わせることによって、生徒の論理的思考を働かせるしかけを意図的に作った。また、「学習のめあて」を提示することで学習者が見通しを持って授業にのぞみ、「振り返り」で自分自身の学びをより深いものへと構造化することをねらった。「振り返り」では、感覚的な気づきと根拠や理由づけを明確にした論理的



な思考プロセスのどちらも大切にしたいと考え、「まずはひとこと」「それはなぜ」という問いによって、学習者の思考を促すといった工夫も生まれた。




実践例を一つ紹介すると、体育科では「三角ロジック」を使って実技での課題をレポートにする取組を積み重ねている。自分の課題を「根拠」とし、学んだ知識や他者のプレーから理解したことを「理由づけ」とし、「結論（主張）」としての解決方法を導き出す。そこには、単なる調べ学習をまとめたレポートではなく、学習者自身の課題解決に役立てたいという授業者の思いがあった。さらに、このレポートをもとに授業で実際に実技の改善に取り組むグループ活動が行われ、体育科における「見方・考え方」につながる取組となった。

（２）今年度の研究

このようにして、論理的思考の研究とその育成に５年間取り組んでいくなかで、いくつかの新たな課題も見えてきた（図 1）。対話をより「深い学び」に導きたい。そのためには、より細やかな論理的思考のための「手だて」が必要であること、カリキュラム・マネジメントを具現化していくこと、そして、それに伴って「教科の特質に応じた見方・考え方」をより大切にしなければならないことである。今年度は、これらの課題を解決すべく研究を行った。




図１　見えてきた課題

## 2　「思考の道しるべ」による「論理的思考」の精緻化

### (1)　話合い活動が「深まるグループ」と「滞るグループ」の存在

少人数のグループ活動を行うと、3～4 人でも議論が深まるグループと、3～4 人では機能しないグループができる。うまく話し合えないもどかしさを感じている学習者の姿をみると、授業者としてこの状況を「学力差」という言葉で片付けたくないという思いが湧いてきた。また、話合い活動をはじめとした言語活動で、どのような思考のプロセスが働いたのかを学習者自身がメタ化し、そこで使われたスキルを客観的に評価することの必要性を感じるようになった。授業者として、言語活動を駆動させるためのどのようなスキルが個々の学習者に付いているのか、または付いていないのかを図るすべはこれまでなかった。学習者の立場から考えてみると、話合い活動の中で何らかの壁にぶち当たったとき、有効な打開策を講じることができないという問題点がある。

そこで、思考のプロセスを細分化し学習者自身が意識することを意図し、「思考の道しるべ」（表 1）を作成した。ここでは、自分の考えを広げ、深め、つなげるための様々な思考パターンをラベリングすることによって項目を立てている。この「思考の道しるべ」を活用することによって思考の観点を明らかにすることができ、より豊かで深い思考を促すのではないかと考え、基幹教科としての国語科で取り組むことにした。

### (2)「思考の道しるべ」の活用

まず「思考の道しるべ」（表 1）を配付し、思考を深めるための観点として提示した項目の説明を行った。その後、話合い活動を行うたびに「思考の道しるべ」を見ながら振り返りを書かせるようにした。そのことによって、自分自身が使っている思考の観点を明確にしようという意図がある。

**思考の道しるべ**　「問題を発見！新たな知の創造を！」　　八幡市立男山東中学校　2019

| Check ✓ | 考えを「広げる　深める　つなげる」　多面化→精緻化→構造化<br>1.5往復の言語活動　・　傾聴　・　最適解（納得解） | |
|---|---|---|
| | 共感１ | （例）「なるほど。」「私もそう思います。なぜなら・・・。」 |
| | 共感２ | 自分と違う意見を素直に聞く。（例）「へえ、そうなんだ。」 |
| | 焦点化 | 話し合いの**観点**をしぼる。（例）「まず○○から話し合っていきましょう。」「次に、○○という点からみるとどうでしょうか」 |
| | 立場を決める | （例）「私はそのことに対して賛成です。なぜならば・・・。」「私は、反対の意見です。その理由は・・・。」 |
| | 意見を述べる | （例）「○○さんの考えに対する意見です。・・・については、私は・・・した方がいいと思います。理由は・・・だからです。」 |
| | 反論する | （例）「○○さんの考えに対する反論です。・・・については、私は・・・した方がいいと思います。理由は・・・だからです。」 |
| | 代替案 | **批判的思考**　反対意見を述べるだけではなく、代わりとなる案を提示する。 |
| | 多面的 | **多面的思考**（例）「違う意見の人はいますか。」「○○さんはどうですか。」 |
| | 問題発見 | （例）「みんなの意見から、・・・が問題なんじゃないかと考えます。」→**テーマ設定**へ |
| | 軌道修正 | 論点から話がそれたとき。「話が横道にそれたので、○○の話に戻しましょう。」 |
| | 整理・確認 | 論点が見えなくなったとき、話を整理する。（例）「ここで、意見を整理します。」 |
| | 仮説・予測 | （例）「Ａさんの案だったら、・・・なりますね。」「Ｂさんの案だったら、・・・なりますね。」 |
| | 評価 | （例）「○○さんの・・・という考えがいいと思います。なぜならば・・・。」 |
| | 因果関係 | **原因**と**結果**を明確にする「その原因は・・・・。」「その結果・・・・。」 |
| | 具体⇔抽象 | **具体**（例）「それは、具体的にはどういうことですか。」「たとえばそれはどういうことですか。」 |
| | | **抽象**（例）「どんな特徴がありますか。」「それはつまり、・・・ということでしょうか。」 |
| | 比較 | **共通点**（例）「ＡとＢを比較すると、○○という共通点があることがわかるね。」 |
| | | **相違点**（例）「ＡとＢとの違いは○○だね。」 |
| | 三角ロジック | **主張・意見**　自分はどうしたいか。　どう考えるのか。 |
| | | **根拠・事実**（例）「データから○○が読み取れます。」「○ページの○行目には・・・。」「最近、○○のようなことがあります。」 |
| | | **論拠・理由づけ**　自分の知識や経験（例）「私は・・・という経験があります。」 |
| | 裏づけ | 理由づけの根拠　前例・法律・きまり |
| | 限定 | 限定的な条件を明らかにする。　→その考えに例外はないか |
| | 予想される反論 | 他の立場からの意見を予想する。 |
| | 補足 | （例）「○○さんの考えに対する補足ですが・・・・。」 |
| | まとめ | （例）「ここまでの意見をまとめると・・・・。」 |
| | 他者から学ぶ | （例）「○○さんの仮説の立て方はわかりやすかったな。」「○○くんのまとめの仕方はマネしてみたいな。」 |

表 1

(3)「思考の道しるべ」による効果

「振り返り」の記述からわかったことは、「思考の道しるべ」を活用することによって、学習者自身が恣意的に行っていた言語活動のスキルやコツといったものに名前をつけ認識できたことである。そして、そのことが学習者の思考を駆動することに結び付いている。

さらに、「共感 2」といった項目の設定によって、自分の意見とは違った意見に対しても傾聴することの価値を共通認識できたことは、自分の意見をためらわず言えるという学習環境を支える大きな鍵となっていることも明らかになった。

また、自分の意見を述べるだけでなく、自分の意見を持った上で他者の意見を聞くことにより、新たなよりよい発見が得られることに気付いた学習者も見られるようになった。この「思考の道しるべ」は、国語の話合い活動のみならず他の学習場面や日常生活の中でも活かすことができる汎用性があることに気付いた学習者もいることが検証された。

> 「人の意見や考えを自分の考えと重ねながら根拠や理由を述べられるようになった。そうすると前よりも、その人の考えも加わっているから共感してもらえるのが多くなった気がする。」　～生徒の振り返りより～

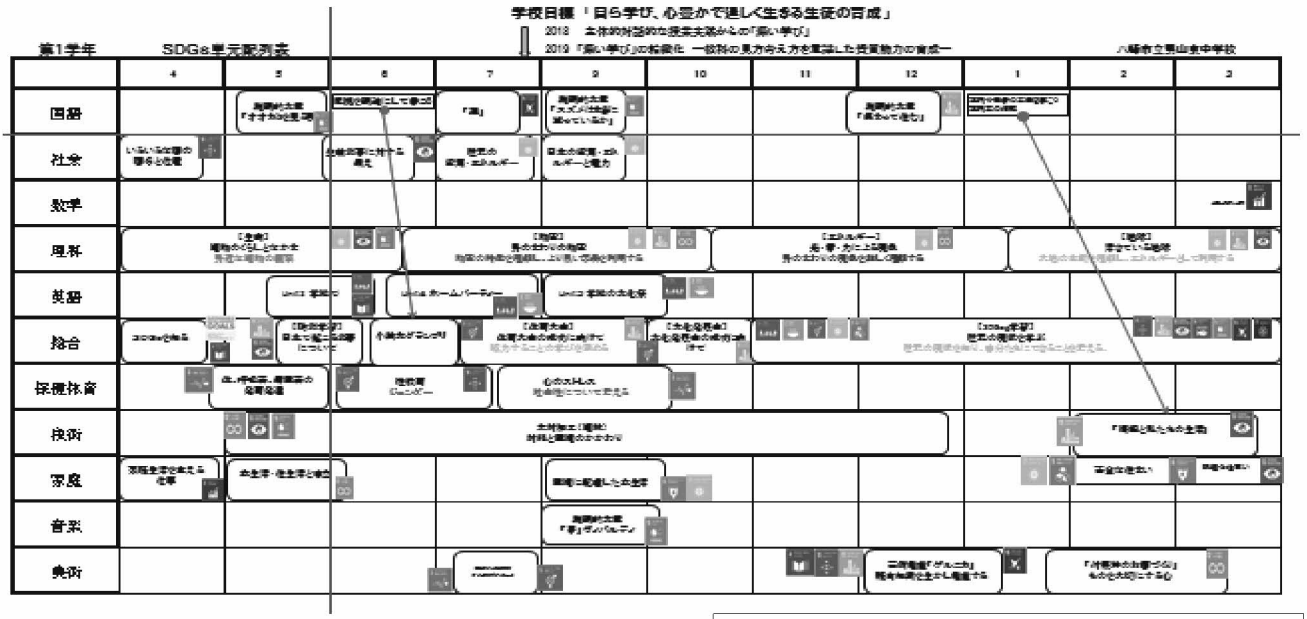



図 2　SDGs カレンダー　1 年生（一部抜

## 3　カリキュラム・マネジメント　～コラボ授業とパッケージ授業～

昨年度の研究では、カリキュラム・マネジメントに取り組むために各教科の学習内容の重なりを校内研修会で見いだした。その上で、各教科の特質に応じた見方・考え方を大切にすることを確認した。また、各教科の学びをつなぐ土台として SDGs（持続可能な開発目標）を取り入れた。各教科の学習内容を社会の出来事や課題と結びつけることを意図し、SDGs カレンダー（図 2）を学年ごとに作成した。このカレンダーを作成する過程で、各教科担当が他教科との学習内容の重なりを教科書で確認し合ったり、SDGs と関連付けたりしたことに

意義があると感じた。このSDGsカレンダーを作成した上で、さらに実際の授業を意識的に結びつけたのが、次に示すパッケージ授業、コラボ授業、そして外部リソースとのコラボレーションも含めたカリキュラム・マネジメントである。

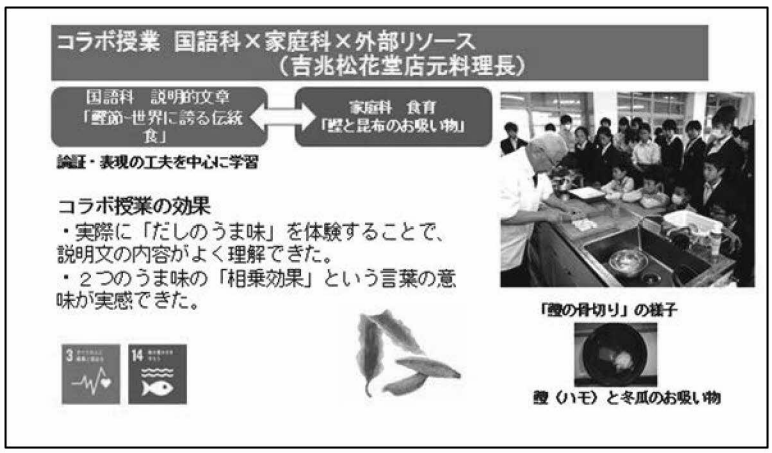
(1) カリキュラム・マネジメントをどう具現化するか

**ア パッケージ授業（総合的な学習の時間×各教科）**




各教科の学習内容の重なりを活かし、総合的な学習の時間でさらに探究的な学習へと発展させる。たとえば、社会科、英語科でともにSDGsとも関連の深い「フェアトレード」について学ぶが、それぞれの授業時間数の中で深めることは難しかった。そこで、総合的な学習の時間を使って探究的な学習につなげていった。その際、外部リソースであるUCCホールディングス株式会社の資料映像やワークシートを使って学習し、夏休みの宿題にフェアトレードに関するレポートを課した。その後、この取組はユニセフキャラバンキャンペーン（10月18日）や小論文グランプリのテーマ設定にもつながることとなった。

**イ コラボ授業 （教科×教科）（教科×外部リソース）（教科×SDGｓ）**




各教科の学びを教科横断的に活かすのが、コラボ授業である。今年度も２年生では、国語科の説明文「鰹節 - 世界に誇る伝統食」と家庭科の食育を同時期に行った。国語科では論証や筆者の表現の工夫を中心に学習し、家庭科では食育で昆布と鰹節のだしを味わった。個別のだしの味は「どちらもあまりおいしくない」というのが生徒の率直な感想だったが、その後、２つのだしを合わせ、鱈と冬瓜のお吸い物を味わった。その結果、生徒たちは、その旨味に驚くこととなった。このコラボ授業の効果は、実体験によって説明文の内容の理解が進み、説明文によって和食のおいしさやその価値を実感できたことである。

(2)　教師による「育成すべき資質・能力」の意識化

カリキュラム・マネジメントを実施するにあたって、各教科に応じた「見方・考え方」を意識すると同時に、社会に出たときに生きて働く力としての 21 世紀型能力と関連付けたいと考えた。そこで、汎用的な能力としての 21 世紀型能力から、基礎的な力としての「言語スキル」「数量スキル」「情報スキル」、思考力としての「問題解決能力」「論理的思考力」「批判的思考力」「メタ認知能力」、実践力としての「自律的活動力」「コミュニケーション力」「社会参画力」「持続可能な未来への責任」の 11 項目について授業実践の中で意識していくために、表 2 のように整理した。（この表は学習指導案等に添付し活用する。）

| 東中の授業で育成する「能力」 | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 基礎力 | | | 思考力 | | | | 実践力 | | | |
| ①言語スキル | ②数量スキル | ③情報スキル | ④問題解決能力（多面的思考力） | ⑤論理的思考力 | ⑥批判的思考力（代替案） | ⑦メタ認知能力 | ⑧自律的活動力 | ⑨コミュニケーション力 | ⑩社会参画力 | ⑪持続可能な未来への責任 |
| | | | | | | | | | | |
| SDGsとの関連 | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |

表 2

## 4　成果と課題

５年間の研究活動を通して、汎用的な能力としての「論理的思考」を軸に、次期学習指導要領の示す「主体的・対話的で深い学び」とは何かを追究し、実践を行ってきた。国語科のみならず、数学科や理科、社会科、保健体育科でもレポートが課せられ、一斉授業による受身の学習から対話的な学習形態へと移行していき、生徒の学習に対する意識も大きく変容してきた。総合的な学習の時間や小論文作成の場面では、生徒による課題設定が行われ、探究的な活動がなされている。そして、カリキュラム・マネジメントを通して、その学びを社会とのつながりの中に位置付けていくことの重要性を実感することができた。

論理的思考やカリキュラム・マネジメントによる授業改善は、直接的に生徒の思考を変えることができる。７年間の小論文の取組を通して、そのことが検証された。

令和元年度第７回京都府小論文グランプリでは、文集の部で最優秀賞となり、６連覇を達成することができた。また、これまで６年間の小論文グランプリの取組に対して、令和元年度第 50 回博報賞国語・日本語教育部門奨励賞を受賞した。

今後の課題は、ここまで積み重ねてきた研究で得た知見を活かし、そして、社会の大きな変化の中で生きていくこれからの子どもたちのために、社会に出たときに生きて働く資質・能力とは何なのかを授業者として常に考え続ける努力をしていくことである。